

## 研究ノート

雑誌『婦人世界』にみられる小野さつき訓導殉職の  
反響とその意味佐藤 久恵<sup>1)</sup>The Analysis of the Notion of Duty: The Case of Reactions of the Readers of *Fujinsekai*  
to the Death of Satsuki Ono, a Primary School Teacher

Hisae Sato

## 要約

本稿では、雑誌『婦人世界』（大正11（1922）年9月号）を中心に、小野訓導殉職の反響とその意味を探った。『婦人世界』で公募された追悼唱歌（歌詞）には、1週間の募集期間で6000通を超える応募があった。

自分の命と引き換えに2人の教え子の命を救ったこと、なお1人を救えなかったこと、そして1人の訓導に責任を負わせたという事実は今日になお問題を投げかけている。本稿は、「その時代時代における価値観」によって「変化する評価」という問題を検討する。

キーワード：『婦人世界』、唱歌、小野さつき、殉職、蔵王町立宮小学校

## 1 問題提起

大正11（1922）年『婦人世界』9月号には、小野さつき訓導追悼唱歌募集に6000通有余の応募があったと記述されている。

本稿では、この雑誌に掲載の当選追悼唱歌6編について、小野訓導殉職の反響とその後の意味を探るために確認し分析した。当時の反響の凄まじさは応募者数によって容易に推測することができるが、次に、購買層がどのような人たちだったのかということにも着目した。

小野さつき訓導は、1992年指導中に川で溺れた受け持ち児童を救おうとして命を落とした。筆者はすでに小野訓導の殉職をめぐる問題について2編の論考を発

表した<sup>i</sup>。1編は殉職を道徳教材として扱うことの問題性を論じ、もう1編は当時の少女誌『少女の友』での扱いを鷹野つぎの文章をふまえながら論じた。

数年後には事件後100年を迎えようとする今、改めて小野訓導の殉職をめぐる言説と解釈とを確認すると、「いとむかし」を比較する形のものが見られ、そこには①事件現場の比較といった事実提示で比較するもの、②現代における類似するような事を比較対象として再解釈の試みをするもの、③現在の様子を比較対象なしに報道して伝えるもの、という伝達の特徴が見られる。

本稿では『婦人世界』9月号での扱いを分析するが、当時の『令女界』9月号を参照し、また『日本の教師 その12章<sup>ii</sup>』で取り上げられている現代的な考察に

1) 佐藤 久恵 東京未来大学こども心理学部非常勤講師 (Tokyo Future University) rsa53310@nifty.com

ついてもふれ、大正時代からの「反響」が、現在にどのように継承され、影響を及ぼすのかを考察した。

## 2 殉職に伴う唱歌募集からみる反響

### 2.1 雑誌『婦人世界』について

雑誌『婦人世界（ふじんせかい）』は、1906年（明治39年）1月3日に実業之日本社から創刊された。「その後の婦人雑誌の原型ともなったといわれる雑誌。当時「売れた」というと7、8千から1万部という時代に30万部の発行部数をほこり、実業之日本社の至宝と呼ばれた」という人気の雑誌である。『実業之日本』『日本少年』『幼年の友』『少女の友』と共に、当時の「実業之日本社の五大雑誌」と呼ばれたということで、創刊した年には、小説『食道楽』で有名な村井弦齋を編集顧問として迎えた。明治から昭和にかけて約30年の間発刊され、1931（昭和6）年に発行元を婦人世界社に移した後、1933年（昭和8年）5月に一旦終刊となった。戦後に別の出版社から一時期復刊されたという事情もある<sup>iii</sup>。

内容的には多岐にわたるが、「大正4年に「日本最初の観光地人気投票—『婦人世界』が募集した「日本新三景—」という記事もあるようで、「読者へ公募する」「読者側からの応募がある」「当選発表・分析結果を報告する」といった読者との双方向的やりとりのノウハウをこの雑誌は既に持ち合わせ、紙面上に反映する方法をもっていたと考えられる<sup>iv</sup>。

### 2.2 『婦人世界』9月号募集唱歌

小野さつき訓導の殉職を悼む「唱歌の募集」記事があったということを筆者はおぼろげに知っていたが、『婦人世界』9月号を目にするまで、何を母体としてそのような公募が行われたものであるのかについては全く知らなかった。前著を執筆する中で『少女の友』9月号に掲載の『婦人世界』の広告欄<sup>v</sup>を見てはじめて知り、さらに今回『婦人世界』9月号<sup>vi</sup>には、当選した歌詞6編が確かに掲載されていることがわかった。その9月号に、以下のような記述がある。

「小野訓導の殉職を嘆美する唱歌募集の企（くわだて）は、発表より締切まで僅かに一週間の短時日（たんじじつ）に関（かかは）らず、集まった應募歌（おうぼか）の数（すう）實（じつ）に六千有餘（いうよ）に及び、いかにこの事件が□天下（てんか）の人心（じんしん）を深（ふか）く感動させたかを察（さつ）するに餘（あまり）あります。（下線は引用者、以下同様）」

募集からメ切まで1週間という短さの中で、6000通余の応募があったと記述されているが、続けて以下のことが記されている。①一等当選者の歌詞には山田耕作氏によって曲がつけられること、②「日本蓄音機商会」より「蓄音機のレコオド（ママ）」として発売の計画があること、③応募歌の原稿は全部記念のため小野家へ贈呈することにした、と続く。1週間で6000通という反響が当時の購読層、郵便事情等の中でどのくらいのものなのか、正確に比較したり、理解したりする術は持たないが、「天下（てんか）の人心（じんしん）を深（ふか）く感動させたかを察（さつ）するに餘（あまり）あります」という前述の言が、誇張ではないと考えていいのではないか。

『同』9月号に掲載の「小野訓導（をのくんだう）の唱歌（しやうか）懸賞當選発表」の記事は、同誌23頁から27頁まで掲載されている。一等から三等までの歌詞6編と、一等になった斎藤の歌詞に山田耕作が曲をつけた譜面が、見開き頁で掲載されている。まず、各当選者の名前と所属とを掲げる。

一等当選作詞者は、兵庫県多紀郡篠山立町の齋藤子郊。  
二等当選作詞者は、神奈川県三浦郡浦賀町鴨居尋常小学校内の横田紘子と茨城県鹿島郡大谷尋常高等小学校訓導の田崎蔚の2名。  
三等当選作詞者は、静岡県田方郡三島町長谷の長たつ子、岡山県御津郡一の宮村西辛川の秋山きみ子、第六高等学校教授の酒井賢、東京赤坂丹後町一奥野村吉、福岡県企救郡会根村吉田小学校寺部□□（判読不明）の5名。

一等当選者の齋藤子郊は『篠山毎日』という旬刊の情報誌の主筆であった。ネット上に「大阪毎日新聞販売店主萩原林三郎が、勤続30年記念として、大正12年3月10日「篠山毎日」を創刊、始めは大阪毎日新聞社より特報を得て、重大ニュースだけを号外式で報道していたが、大正15年、当時専売特許を得た単式印刷（石版印刷）の分権を受け、齋藤子郊を主筆として月3回発行することとなり、異彩を放っていた（以下、略）<sup>vii</sup>」という記載をみつけることができる。

掲載された子郊<sup>viii</sup>の作詞は以下のとおりである。

- 一 先生（せんせい）わたしは拝（おが）みます  
川（かは）に溺（おぼ）れた友（とも）だちの  
三（みつ）つのいのちは二（ふた）つまで  
尊（たふと）い御手（みて）に生（い）きました
- 二 先生（せんせい）わたしは拝（おが）みます  
一（いつ）しょに死んだ友だちの  
小（ちい）さいいのちは安（やす）らかに  
星（ほし）のお國（くに）にねてゐます
- 三 先生（せんせい）わたしは拝（おが）みます  
大（おほ）きくなつた後（のち）までも  
小野（をの）のさつきという御名（みな）を  
胸（むね）のお宮（みや）にまつりませう

他者の歌詞と決定的に異なる特徴は、歌詞の冒頭が3番まで重複して同じ歌詞だという点である。技巧的とまでは言えないかもしれないが、曲をつけられることを意識しての作詞だったと解釈すべきか、一等と決まってから、歌詞になんらかの修正が入ったかのいずれかの理由があると思う。筆者は齋藤が意識したのは、唱歌という性質をふまえて、児童が口ずさめるような平易なものであったのではないかと考える。

二等当選者の横田紘子の所属は「鴨居尋常小学校内」とあるが、職の記載はない。その歌詞が「あみちのくは宮城野の しろいしがはは夏さむし

みなそこふかく教え子を 抱きてきみは逝きましぬ」という歌詞の「抱きてきみは」から在籍児童等ではなく、訓導または職員、職員家族であると推測することができる。

同2等の田崎蔚は茨城県の「訓導」とある。同業者であるが故の思いもあったかもしれないが、歌詞から田崎自身の視点が伺える。

- 一 七夕の夜は悲しいな 白石川がうらめしい  
生徒を助けるばつかりに よい先生が死にました
- 二 小野先生と申します お年は若い二十二の  
女の先生でありました 心の清い方でした
- 三 生徒はみんな泣きました 村の人まで泣きました  
「よく死んでくれた」先生の お父さんだけ泣きません

特に、三番の歌詞にみられる「「よく死んでくれた」先生の お父さんだけ泣きません」という歌詞は、もう少し正確に文言を補えば、「(小野さつきの殉職について)「よく死んでくれた」と言った先生のお父さんだけは泣きません(でした)」ということであろう。筆者が前著<sup>ix</sup>で述べた解釈「死に際して、ただ悲しむ」ことだけでは解決できない家族の葛藤が表れている。また、対句的表現で「生徒とも村人とも異なる」立場と感情とを対照的に表している。

このことを見通すことができたのは、作者が「訓導」という職にあり、同種の体験をしないと限らない立場にあったためではないか。また、「よく死んでくれた」は小野の父の発言を引いたもので、当時とところで記述や見出しに使われていたことから、印象深いものとして、歌詞のモチーフとしたのだろう。

同じく二等の横田の詞は先にも一部掲げたが抒情的で美しい。

- 一 あみちのくは宮城野（みやぎ）の  
しろいしがはは夏さむし  
みなそこふかく教（をし）へ子（ご）を  
抱（いだ）きてきみは逝（ゆ）きましぬ

- 二 をしへ子(ご) おもふ一念(ねん)は  
おのがいのちもうたかたの  
三つのたましひ二(ふた) つまで  
すくひしものは今(いま) ははや
- 三 ああみちのくは宮城野(みやぎの)の  
白石川(□□□未判読)に風(かぜ)たちて  
ふみづき來(く)ればのこされし  
川原(かはら)なでしこ涙(なみだ)せむ

三等当選者の酒井賢は、官立第六高等学校(岡山県岡山市)教授とある。そのためなのか、「花」「星」「世」「影」「照らす」などの言葉の使用からか、歌詞全体から旧制高校寮歌の雰囲気を感じられる作風である。

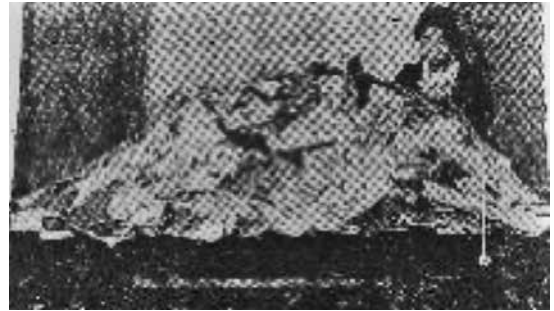
- 一 刈田(かつた)がふもと白石(しろいし)の  
河原(かはら)なでしこ花散(はなち)りて  
七月七日(ぐわつなぬか)たなばたの  
星の光もひややけし
- 二 ながれは疾(はや)し児(こ)は三人(みたり)  
たたかふ腕(かひな)たをやめの  
力(ちから)つきけむみたりめの  
児(こ)ともとともに沈(しづ)みける
- 三 小野訓導(のをくんどう)のいさほしは  
人世(ひとよ)の花とかほるらん  
にごりのすゑに澄(す)む月(つき)の  
影(かげ)はとこよを照らすらむ

この受賞にあたり、それぞれの当選者には、賞金が与えられた。本誌上に記載された額はそれぞれ一等200円、二等50円、三等20円とされている。

### 2.3 読者層についての考察

「唱歌募集」とその「応募状況」、さらには、選ばれた誌上の歌詞6編を含む6000通の投書は、小野訓導の殉職の反響を考察する上で重要な事実であると言える。『婦人世界』9月号には、以下の画像が掲載されており、「全国から集まった懸賞唱歌の投

書の山」と説明書きがついている。向かって右にいる女性の半身が隠れるほどの投書数だったことがわかる。



この時期30万部が売れていたという『婦人世界』が1週間で6000通の投書を得たわけである。

その読者層については「女工」及び「新中間層」であったと推定されている。

「女工」については石田あゆみが次のように述べている。

「大正8年～大正10年にかけての雑誌購読者状況をみると、調査対象の属性は「女工」ではあるものの、『婦人世界』は上位に位置づけられている。大正8年に東京でおこなわれた「製糸工場に於ける女工事情」の読物調査の結果では、270の回答うち、第1位の『婦人世界』が101人の読者なのに対し、第2位の『婦女界』は66人となっている。大正10年の東京市社会局による「女工に関する調査概況」掲載の「購読雑誌」調査では、722の回答のうち201人が『婦人世界』と答えて第1位となっており、第2位の『主婦の友』96人とは大きく差が開いている<sup>3)</sup>。」

「新中間層」については青野季吉が、「婦人雑誌が購読可能なのは新中間層<sup>4)</sup>」と推定しているが前田愛がそれを、学歴と社会的自覚の高い「選ばれた読者層の存在」と補足した上で肯定している。「新中間層」は日本で大正期に成立し、賃金労働者のうちの現業に属さないサービス業など第三次産業を生業とする人たちで、つまり、その家庭に属した婦人たちということになる。「女工」と「新中間層」の女性が婦人雑誌の急激な発展を支え、昭和5(1930)年前後に読者数が頭打ちとなるまで、増加の一途を辿った。

『婦人世界』は大衆的なメディアの一角を占めたと言える。

そのことから考えられるのは、「女工」及び「新中間層」に属する女性たちが、「小野訓導の殉難」を共有していったということである。

### 3 小野訓導殉職の現在の捉えと変化する教訓

#### 3.1 「いまとむかし」型の「場所」比較による捉え

『広報ざおう』<sup>xiii</sup>「写真で見る ふるさと いまむかし」シリーズでは、2014年5月の『広報ざおう』に「第4回 小野さつき訓導殉職地（白鳥公園）」が紹介されている。小野訓導が殉職して92年目にあたる時期である。この中で興味深いのは、以下の記述の下線部（下線は引用者）である。

「宮村では、小野訓導の死を悼み、その勇気と自己犠牲をたたえて村葬をもって送ることとしました。三谷寺で行われた村葬では、文部大臣や県知事、新聞社などからの表彰をはじめ60通もの弔辞が寄せられ、一万人を超える会葬者が訪れたと伝えられています（写真③）。また、身をていして社会に尽くすことが美德とされていた当時の風潮を受けて、この悲劇を描いた映画や読み物、唱歌などが作られ、美談として全国に広まりました。」

この紙面では殉難の地を当時の写真と現在の写真で比較し、そして上記下線部のような記述がなされている。上記下線部の「身をていして社会に尽くすことが美德とされていた当時の風潮」が示すことは、当時の『令女界』9月号の投稿欄及び記事からみることができる。

お葬式の当日は私も会葬いたすべく、五里餘の道を若干の生徒を連れて参りました。途中で愛の女神のやうなさつき先生を呑んだという白石川を見た時には、あまりの恐ろしさに呆然としてしまひました。この物凄い激流に死を覚悟して飛び込まれた雄雄しい行為には、生徒と共に感激の涙を流しました。（略）宮村に入りますと戸毎に立て

られた国旗の傍に、『謹みて小野訓導に弔ひを表す』との張紙が目につきました<sup>xiii</sup>。

また、宮城県女子師範学校長秋葉馬治による寄稿文には次のような部分がある。

「（前略）今度（こんど）の事変を聞いた時学校（がくかう）中（ちゆう）は全（まった）く驚（おどろ）きと悲（かな）しみに閉（と）ぢられてしまひました。そして職員生徒（しよくゐんせいと）を始（はじ）め僕婢（ぼくひ）に至（いた）るまで彼（か）の女（ぢよ）の惨（いた）ましい最期（さいご）を哀惜（あいせき）してやみませんでした<sup>xiv</sup>。（後略）」

彼女を直接に知る者と直接には知らない者との間での違いを見ることができると同時に、小野訓導の死が肯定的に受け取られたことが読み取れる。また、会葬後の東京市視学長佐々木吉三郎の家族への次の言葉が象徴的な雰囲気を持つ。

「この度（たび）のことは御同情（ごどうじやう）に堪（た）えませんが、しかし、お嬢様（じやうさま）の見事（みごと）な最後（さいご）は天下萬民（てんかばんみん）の等（ひと）しく嘆美尊敬（たんびそんけい）措（お）かざるところですから、せめてはその点（てん）でお諦（あきら）め下さい、名誉（めいよ）の戦死（せんし）でございます」といつて暇（ひま）を告（つ）げると（後略）、」

「名誉の戦死」という言葉がいつ頃から比喩的に使われていたのかはわからないが、「身をていして社会に尽くす」ということに該当しているといえよう。しかし、当時の東京市の視学たちがすべて同様な理解を持っていたかどうかはわからない。

#### 3.2 危険性を孕む「いまとむかし」の比較

『日本の教師その12章<sup>xv</sup>』で取り上げられている同事件についての久富の考察について、以下に引用する。

「もし宮小学校事件が現代に起きていたならば、若い小野先生はその美拳が顕彰される以前に、「梅雨明け直後の増水した河原に、小学4年生多数を野外写生に連れて行き、結果として子どもの一人を死なせてしまった」その責任を先に追及されるのではないかと心配する。」

大正11(1922)年の小野訓導の殉難の当否を現在の視点で評価することは難しく、また、本来「比較してはいけない」ということがあると思う。しかし、あえて考えてみると、小野の評価の中には「既に2人を救出している」という「人命救助の評価」がなされている。また、「緊急時のとっさの判断」というものにおいて、大正11年当時は「自身の安全の確保を含まない」ものであった。しかし現在、救助に当たる場合の前提は「まず、自分自身の安全を確保する<sup>xvi</sup>」である。「命への感覚の変化」は同書にも分析があるようであるが、この殉難とその後の顕彰について考えるときには、「小野訓導本人の救出を含む全員救出の願い」が、宮小学校だけではなく教職者全体の広い同僚性の中に生じたと考えるのが妥当ではないだろうか。新卒の訓導に命がけの責務をさせたという先輩教職者の悔恨や負い目が生じたのではないか。

### 3.3 現在の報道の中で伝えられるもの

2018年6月9日『産経新聞』に「児童助けようとして殉職、小野さつき訓導の企画展、あす映画上映 蔵王」という見出しと以下の記事がある。

小野訓導が殉職時に着用していた襦袢(じゅばん)や袴(はかま)などの遺品や出勤簿、村葬の写真パネルなどを展示。熱心に見入っていた同町の旅館の女将、佐藤久美子さん(68)は「子や孫に小野先生のことを伝えなければならないと改めて思いました」と話した。

同日の『河北新報』では、「小野訓導の教え後世へ 教え子助けようと殉職 大正期の映画あす蔵王で上映」という見出しと以下のような記事がある。

1922(大正11)年、白石川で溺れた教え子を助けようとして21歳で亡くなった宮尋常高等小(現蔵王町宮小)の小野さつき訓導(教諭)を取り上げた同年制作の映画が10日、宮城県蔵王町のございんホールで上映される。小野訓導の人物像をテーマにした企画展も開かれている。

(略)

小野訓導と亡くなった男児のそれぞれの父親が相手を思いやり「死なせてしまい申し訳ない」と語ったという逸話も紹介している。

両紙から読み取れることは、展示と映画会が企画されたことと、「今後、子や孫に伝えていかななくては」という風化を防ぐ言葉である。

また、「小野訓導と亡くなった男児のそれぞれの父親が相手を思いやり「死なせてしまい申し訳ない」と語ったという逸話」の紹介がなされているが、この逸話の紹介は、筆者の最初の論考でふれたとおり、殉難当時もなされ、現在も取り上げられている。この両者の父親の態度と言葉が、時を経てもなお語りつがれているわけである。

## 4 まとめ

2018年7月、104歳で逝去された元群馬県公立小学校教諭・両角千鶴子<sup>xvii</sup>氏のオーラルヒストリーには、小野訓導に関する言及がある。筆者は2017年に発表した2編目の論考で、語られた「小野訓導に関する」部分を取り上げた<sup>xviii</sup>。大正11(1922)年に起きたこの事故を、氏は師範学校の教育を受ける中で口伝えに聞いて記憶していた。

夏になるとプールでの水泳授業がありました。小野訓導のエピソードもあって、女の先生も、子どもを救う使命があるから、全員泳げなければいけないとされていました。私は利根川で泳いでいたので、泳ぎに心配はありませんでしたが、水泳大会になると、一部の人たちにはかえませんでしたが、女学校から入学した二部生は、みんな委縮している感じでした。(下線は引用者)

戦前の教員養成には「女の先生も、子どもを救う使命がある」という部分に、小野訓導の殉難の影響が色濃く残っていたのである。

本稿では、雑誌『婦人世界』（大正11年9月号）を中心に、小野訓導殉職の反響とその意味を探った。1週間の募集期間で6000通を超える応募があったというが、それがどのようにして起こったかは今のところ解明できていない。当時30万人の購読者がいたという一雑誌だけの効果ではなく、当時の複合的な情報（新聞報道、講演、演劇等）がこの応募数を生んだのではないかと推測している。実は、この前号の『婦人世界』8月号には公募の記事を見つけることができないので、実業之日本社の同系列の雑誌や、当時の新聞を利用して急遽公募が図られたのではないかと推測するが、正式にどこで公募がかけられたのかは、突き止められずにいる。

まもなく、事件後100年を迎えようとする今、改めて理解し確認することができたのは、近年この小野訓導殉難について、「いとむかし」を比較する形での伝達と解釈が現れていることである。そこには①事件現場の比較といった事実提示型の比較をするもの、②現代における類似事件等を比較対象として再解釈の試みをするもの、③現在残された資料を（報道として）伝えるもの、というかたちがあるが、これらは、次代に残っていくときに自然に起こる検証作業のようなものと言ってよいだろう。

また、現代の視点で考察を加えた『日本の教師その12章』については本来比較すべきでないという前提をおいた上で考えると、小野訓導の行為に、2名の人命救助がなされていること、なお1人の教え子を救えなかったこと、新卒訓導に命をかけた責務を負わせたこと、それから、命に対する理解の変化が生じていることがわかる。

しかし、筆者は小野訓導の殉職についてもう一步ふみ込むことを研究の課題と考えている。大正時代の6000通の「反響」は、『婦人世界』において「唱歌」という形であらわれていたが、現在、この歌を実際に聞くことはまれである（個人でネット検索をして

聞くことはできる）。しかし、唱歌が言い伝えに果たした期間は長くないのかもしれないが、この事件が現在に至ってなお教師の役割、職務のあり方について投げかけている問題は小さくないと考えるのである。「時代時代における価値観」によって「変化する評価」という特色を帯びながら、現在も改めて、殉難の事実が広く共有化される可能性を秘めているように思われる。

## 注

- i 佐藤久恵「道徳教材としての殉職についての一考察－小野さつき訓導遺徳顕彰館に触れながら－」『東京未来大学研究紀要』第10号、2017,pp.211-220  
佐藤久恵「小野さつき訓導の人命救助と殉職の捉えについての考察－鷹野つぎの随筆と『少女の友』小野訓導追慕号にふれながら」『東京未来大学研究紀要』第12号、2017、pp.149-154
- ii 久富善之『日本の教師その12章』新日本出版社、2016
- iii 石田あゆ「大正期婦人雑誌における女性・消費イメージの変遷：『婦人世界』を中心に」京都大学『京都社会学年報』2001、p56
- iv 有馬誉夫「大正4(1915)年 日本最初の観光地人気投票－『婦人世界』が募集した「日本新三景」－」日本観光研究学会全国大会 学術論文集、2014
- v 『少女の友』9月号実業之日本社1922,広告欄
- vi 『婦人世界』9月号実業之日本社、1922
- vii 兵庫県篠山市のHPに齋藤子郊が『篠山毎日』（月3回発行）の主筆であったことがわかる（<https://www.city.sasayama.hyogo.jp/pc/database/75koutsuu07.html>・平成30年9月5日確認）。
- viii 「篠山小唄」の公募にも応募しており、採用されている。「1931（昭和6）年、市商工会の前身団体が、民謡「篠山小唄」の歌詞を募った。齋藤子郊（しこう）という地元の人の作品が採用され、その4番に初めて「ぼたん鍋」という言葉が登場する。「御嶽（みたけ）おろしに舞う雪の 窓の小篠に積（つも）る夜は 酔うて凭（もた）れて思われて 沸（たぎ）るなさけのぼたん鍋」

(<http://tourism.sasayama.jp/2010/11/post-214.html>・平成30年9月5日確認)

- ix 前掲 i
- x 『婦人世界』前掲、二等の横田の詞は「一番」で「しろいかは」「三番」で「白石川」(よみがな未判読)と書き分けられている。現地では「しろいしがわ」と現在呼ばれているが、当時の呼称は正確にわからなかった。
- xi 石田あゆみ著前掲, p59
- xii 前田愛著『近代読者の成立』岩波現代文庫, 2001, pp.222-223
- x iii 『広報ざおう』第597号, 2014
- x iv 『婦人世界』9月号前掲, p158
- x v 『令女界』9月特別号宝文館, 1922, p20
- x vi 久富善之『日本の教師その12章』前掲, p17
- x vii 消防庁国民保護・防災部参事官付『平成29年度救助技術の高度化等に関する検討会報告書』2018, p12
- x viii 両角氏は元群馬県教諭。彼女のオーラルヒストリー

の中には小野訓導殉職のエピソードが語られている。

- x ix 両角千鶴子・玉置豊美・所澤潤・高橋浩・赤羽明・佐藤久恵・「オーラルヒストリー 群馬県の一女教師の歩み」-昭和一桁の群馬県女子師範学校の体験を中心に-『群馬大学教育実践研究』第23号、2006, pp.327-336

## 謝 辞

東京未来大学こども心理学部教授 所澤潤氏、同 教授 神部秀一氏、同 講師 後藤正矢氏に深く感謝申し上げます。また、日本近代文学館、群馬県高崎市立図書館のレファレンスの方々にお世話になり『婦人世界』の複写、取り寄せをして頂きました。

(さとう ひさえ)

【受理日 2018年10月9日】